日経 大丸有 SDGs フェス NIKKEI ブルーオーシャン・フォーラム
「海の未来を守るイノベーションと産官学連携」
(2024 年 9 月 11 日)
穂坂泰外務大臣政務官による講演

●本日は御挨拶の機会をいただきまして、大変光栄に思います。外務大臣政務官の穂坂泰でございます。
●日本において、海は身近で、日々の生活に不可欠な存在です。世界全体でも 30 億人以上の人々が、海洋と沿岸の生物多様性に依存して生活しています。人類の共通財産である海洋環境の保全は、我々の共通の責務です。
●日本は世界有数の海洋国家であり、また様々な分野で世界を変えるイノベーションを生み出してきた国であります。私自身、各国・国際機関の要人と会談を重ねる中で実感しておりますが、日本ならではの海洋に関する知識や経験の共有を進めてほしいという高い期待が寄せられております。
●イノベーションと言うと、先端技術の活用に焦点が当たることが多いですが、同時に、我々の考え方や社会の仕組みの革新を進めていくことも非常に重要です。ハード・ソフト両面でのイノベーションを促進する上では、産官学の連携が不可欠となります。本日、イノベーションと産官学連携がテーマとされていることは、大変時宜を得た問題意識であると考えます。
●本日のテーマも踏まえつつ、私からは、海洋環境をめぐる国際的な動向、特に、国際的なプラスチック汚染対策、そして来年に控えております第３回国連海洋会議に向けた議論について御紹介したいと思います。

●まずプラスチック汚染対策についてです。海洋を含めた環境におけるプラスチック汚染は、グローバルな環境問題として認識されていますが、日本は、この分野での国際的な議論を積極的に主導してまいりました。
●2019 年の G20 大阪サミットの機会には、2050 年までに海洋プラスチックごみによる追加的な汚染をゼロにする「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」を提唱しました。昨年の G7 広島サミットでは、これを 10 年前倒しし、2040 年までに追加的な汚染をゼロにするという野心を持ってプラスチック汚染

を終わらせることへのコミットメントを、G7の国々と確認しています。

●2022 年に始まったプラスチック汚染対策に関する条約の交渉については、本年末に釜山で５回目の交渉会合が予定されています。日本は、プラスチックの大量消費国・排出国を含む多くの国が参画する、実効的かつ進歩的な枠組みを構築すべきだと、強く訴えてきているところです。

●皆様御存じのとおり、プラスチックは我々の生活に有用な素材であり、賢く活用するためのイノベーションが重要です。日本では、製品の軽量化を通じたプラスチック使用量の削減や、再生利用を容易にするための工夫が施された製品設計、生分解性プラスチックなどの代替プラスチックの開発など、多くの革新的な取組が進んでいます。日本はこうした国内での取組も踏まえつつ、議論に積極的に参加しているところです。

●また、プラスチック汚染の大きな原因は、不十分な廃棄物管理です。各国が、社会全体で、プラスチックのライフサイクル全般にわたる対策に取り組むことが重要です。特に、我が国としては、日本の培ってきたノウハウや革新的な製品・技術などを裏付けとしつつ、廃棄物管理の重要性について各国の理解を促しているところです。

●次に、海洋及び海洋資源の保全や持続的利用に関する、より幅広い国際的な議論について、申し上げます。

●来年６月、フランスのニースにおいて、第３回国連海洋会議が開催されます。この会議では、SDG14 で掲げられた「海の豊かさを守ろう」という目標の実施支援のための方法と手段の特定、革新的な資金調達などといった解決策の推進等が主な議題となります。

●先日、この国連海洋会議で行われるパネルディスカッションのテーマが決まりました。持続可能な漁業管理の促進、海洋汚染の防止・削減、海洋からの持続可能な食料の役割、海洋・気候・生物多様性の相互関係、持続可能な海洋経済・海上輸送、海洋関連の科学・教育等、本日御登壇の皆様の取組とも深く関連するテーマが取り上げられます。我が国としても議論に積極的に参加し、優れた取組を世界に発信していく所存です。

●イノベーションから生まれる優れた技術や仕組みは、国際社会における日本のプレゼンス、競争力、交渉力にも直結するものです。本日のセッションのテーマを拝見すると、多様な切り口で、海洋や海洋資源の保全と持続可能な利用に資する革新的な取組が数多く行われていることを改めて実感いたします。国際的な議論が進む中で、我が国の優れた取組を共有していただき、大変心強く思います。

●海の豊かさを守る SDG14 は、他の SDGs とも関係しており、各目標との連携を一層進めることも重要です。気候危機が一層深刻化する中、脱炭素社会の実現に向けた取組と海洋環境保全の取組との両立や相互作用も重要な論点となります。こうした観点も踏まえつつ、活発な議論を期待いたします。

●また、海の未来を守るイノベーションに広がりを持たせていく上では、様々な場を通じた発信や連携の促進も重要です。いよいよ来年４月に迫った大阪・関西万博における「ブルーオーシャン・ドーム」の設置に向けた準備状況や、地域や大学を拠点とした産官学連携の推進から生まれる様々な可能性についても、具体的なお話を伺うことを期待しております。

●昨年策定された日本政府の第４期海洋基本計画においては、「世界の国々が参考とし、応用することが可能な日本の優れた取組を日本モデルとして推進」するとされています。日本の産官学が連携して生み出していくイノベーションこそが、この「日本モデル」を形作っていくのだと思います。

●本日の皆様の御議論も通じて、新たな視点やアイディアが生まれ、次なるイノベーションと産官学連携の促進につながっていくことを心から祈念し、私の挨拶に代えさせていただきます。御静聴誠にありがとうございました。